

俳句通信

特別作品25句 青柳志解樹
「山村の冬」

特集

〈実力作家20句競詠〉②

鈴木節子	「命いただく」	岩岡中正	「秋風の辻」
本田攝子	「冬景あれこれ」	柴田佐知子	「日向ぼこ」
柏原眠雨	「郷土の森公園」	筑紫磐井	「おつぱい」
星野恒彦	「ものの影」	藤本美和子	「火の神」
栗田やすし	「実月桃」	中原道夫	「晝餅」
山崎房子	「秋の日々」	南 うみを	「江若」
出口善子	「臘月雑考」	星野高士	「雨粒」
奥名春江	「火恋し」	林 桂	「みなかみ紀行」
松岡隆子	「行くほどに」	中西夕紀	「玉眼」
源 鬼彦	「雪の言葉」	角谷昌子	「吾が髪膚」
寺井谷子	「海鼠捕り」	佐怒賀正美	「ぬめり」
坪内稔典	「原発の海」	坊城俊樹	「うすばんやり」
山尾玉藻	「模範」	白濱一羊	「八月十五日」
渡辺純枝	「野のマリア」		



好井由江50句「明日も晴」
市川榮次100句「癌告知 II」

【3人競詠20句】

遠藤由樹子 「落葉踏む」
小林貴子 「水馬」
長嶺千晶 「銀錆の闇」

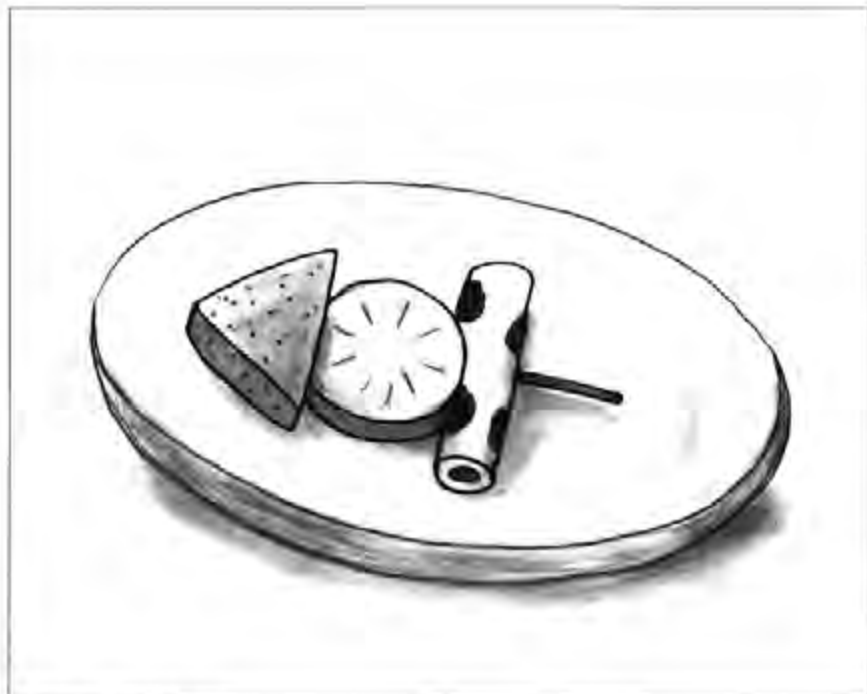


イラスト 田中九葉子

おでん

戸の隙におでんの湯気の曲り清え

高浜虚子

提灯の三つに一字づつおでん

下田実花

おでん酒風くるぐると吹き通り

草間時彦

いまもあるのかどうか。わたしが40代のころ、新橋駅の近くに有名なおでん屋があった。よくその店にいき、熱燗とおでんの冬の夜をすごしたが、何度目かに行ったとき、テレビを見ながら店員が大よろこびしているのに出くわした。巨人が点を入れるたび、拍手したり大声を出したりしているのである。

以来、その店にいくのをやめた。小学生のころはわたしも巨人ファンで、大下とか青木とかの名が銘られた鍋物のペーゴマを持っていたが、10代になるとアンチ巨人になった。巨人ファンには強いものについていく体制順応型の精神構造があるように感じたからだ。「水戸黄門」ファンにも似たものがあるかもしれない。悪をやっつける黄門さまを庶民が土下座してあがめる図は何なのか。

そういえば、40代のころのわたしは、おでんの種のひとつ、筋蒲鉾が好きだったが、家で作るおでんにそれが入っていない。それはちょっぴり残念なことなのである。

(大崎紀夫)

特別作品25句

山村の冬

青柳志解樹

わが山河昔のままに冬迎ふ
初時雨鋭き声残し小鳥去る
飛石を打って仕上がる庭小春
鹿間引く協議一決村議会
欠伸するかに暖冬の雑木山
椋鳥の騒ぎ納まる夕時雨

前号に続きへ実力作家20句競詠に27人の俳人に
寄稿して頂きました。

他のページの作品を含め、ここに俳句世界の現在の
風景がひとつ見えてくるかもしれません。

特集へ実力作家20句競詠②

鈴木節子

出口善子

山尾玉藻

中原道夫

佐怒賀正美

本田攝子

奥名春江

渡辺純枝

南 うみを

坊城俊樹

柏原眠雨

松岡隆子

岩岡中正

星野高士

白濱一羊

星野恒彦

源 鬼彦

柴田佐知子

林 桂

栗田やすし

寺井谷子

筑紫磐井

中西夕紀

山崎房子

坪内稔典

藤本美和子

角谷昌子



前列右から 吉田氏、藤本氏、波戸岡氏
後列右から 星野氏、井上氏、鎌田氏

ゲスト

井上泰至・鎌田 俊

波戸岡旭・吉田幸敏

ホスト

星野高士・藤本美和子

編集部 超結社句会第42回目です。ゲストは「若葉」同人の井上泰至さん、「河」編集長の鎌田俊さん、「栗」同人の吉田幸敏さん、「天頂」主宰の波戸岡旭さん、ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 今日は4点句が3つですね。まず、

イヤホンでふさぐ両耳文化の日

（後掲）

旭 詠みにくいところなんです。が、「イヤホンでふさぐ」で、全て分かったやいますよね。「文化の日」が、まあまあ付いてますね。付き過ぎの感じもしますが。

俊 「文化の日」以外でもあるかなとは思ってますけど。それなりに「文化の日」は効いている。「イヤホンでふさぐ」というのは電車のなかで音楽聞いているのかゲームしているのか、あるいは英会話か。病院の中という可能性もないわけではない。「ふさぐ」というのはマイナスの感じの言葉なんです。景としては何かを享受しているところで、そこが「文化の日」と合っているのかなと思いました。